
呪われた血

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた血

【Nコード】

N2435T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

悲しき運命に翻弄された木曾義高と大姫。

大姫は義高の死のショックからか、ふさぎこむようになり、若くしてその生涯をとじてしまった。

しかし、大姫の思いは報われることはなかった。

死して暗闇に沈む彼女に、声が聞こえた。

サイト、dノベ転載

呪われた血 < 1 >

「大姫……？ 大姫！ いやー！！！」

お母様の声が遠くで聞こえた気がした。

私は気づくと、真つ暗な所にいた。

部屋、とも言えなかった。

どこかに壁があるような気配は感じなかったからだ。

どこまでもその空間が続いているようだった。

しかし、不思議と怖い、とは思わなかった。

それに、私の心にあるのは、ただ一つのことだったから。

——義高様……。

——……姫……。

その時、声が聞こえた気がした。

私は驚いて、辺りを見回す。

「誰?!」

——怖がらないでください、姫。

今度は声がはっきりと聞こえた。

「……誰？」

怖がるな、という方が無理だった。

姿が見えないのだから。

——よかった。私の声が聞こえますね。今は姿を見せることはできないけれど、私の話を聞いてくれますか。

私は、その声に聞き覚えがあつた。
聞き覚えがあるなんてものではなかつた。
思わず、名前を叫んでいた。

「義高様……?!」

——…違います。この声は、ただ君が一番聞きたがっている声に変えただけでございます。私は、誰でもありません。
声は、悲しげな調子になった。

義高様でないのなら、なぜ、そんな悲しい声を出すのだろう。

——ところで、姫はここがどこかわかりになりますか？

「いいえ。私の記憶にこのような場所はないわ」

——そうでしょうね。それでは、ご自分がお亡くなりになられたことは？

「……それは、何となくわかつてる……。たぶん、お母様の声が遠くで聞こえたあの時。何より、私は望んでいたもの、こうなることを」

——なぜ？

「義高様のいない世界は、途端に私にとって色が消えた。誰もかれも信じられなくなった。ただ、義高様に、会いたかつた」

——ですが、姫は見なければならぬことがまだあります。そのお年で亡くなられるには惜しかった。

「それは、何？」

——それは、姫自身に見つけていただきたく思います。この暗闇は今は何もない暗闇ですが、歩いているうちに何かが見えてきます。それに触れれば、自然と道は開けてきます。

「あなたは、一緒にいてくれないの？」

——手助けをする、という意味では一緒にいられませんが、私はいつも姫を見守っております。

「わからないわ。私はどこへ行けばいいの？」
——それも、姫のお心のまま……。

心配が消えた。

私は、急に心細くなった。

やはり変わらずに、どこまでも続く闇。

ここから私は道を開くことができるのだろうか。

正直、恐ろしかった。

しかし——。

私は意を決して立ち上がり、思う方へ歩いてみることにした。

呪われた血 <2>

しばらく歩いていると、他と色の違う地面が見えた。
いや、色が違うのではなかった。

光が、見えた。

大姫は、その一歩手前で立ち止まった。

しばらくその光を見つめると、しゃがみこみ、その光に手を差し伸べる。

すると、彼女の体はその光に溶け込むように、その空間から消えた。

大姫は一瞬意識が遠のき、また気づくと、やはり同じように黒い空間が広がっていた。

だが、何となく先ほどまでいた所とは違うような気がした。
妙な圧迫感を、大姫は感じていた。

——誰だ、そこにいるのは。

空間から響く声ではあったが、はっきり呼び止められた。

大姫は、どこを見ていいかわからず、辺りをぐるぐると見回した。
すると、地面から影が伸びてきた。

大姫がその影を見ると、見覚えのある人物に形作られていく。
それは、大姫の父、源頼朝だった。

「姫……………」

頼朝は驚きに目を見開いて、大姫を見ていた。

その目に、他人を見るようなものを感じ、大姫の心は少し痛んだ。

だが、少しだけだった。

不思議と、大姫も目の前の人物を父と思えなくなっていた。

そして、お互いに存在を認識すると、急に周りの空間が変異した。気づくと、大姫は頼朝の枕元にひざまずいて、頼朝の顔を覗きこんでいた。

頼朝は仰向けの姿勢で、大姫を見ていた。

その表情だけは、先ほどと変わらなかった。

大姫は、表情を動かさず、ただ頼朝を見ていた。

随分と、頼朝はやつれた顔になった、大姫は思っていた。

「お久しぶりでございます、父上」

その声音は、優しく落ち着いていた。

その若い外見とは不似合いなほどに。

「何ゆえ、私の元へ現れた」

頼朝は静かに口を開いた。

もう、その顔は落ち着いていた。

だが、声はやはり弱々しい響きがあった。

大姫は、少し寂しく思った。

「私もわかりませぬ。永遠の暗闇の中を歩いていましたら、父上の元へたどり つきました。もしかすると、御仏の導きやもしれませぬ」

頼朝は大姫をただ見つめていた。

そして、また静かに口を開く。

「お前には、辛い思いをさせたと思っている」

そう言つと、頼朝は目をつむった。

まだ何か言うかと大姫は待っていたが、それ以上は頼朝は何も言わなかった。

「私はわかっております。父上のしたことの意味を。ですから、どうかお気になさらないくださいませ」

「……………」

頼朝は黙っていたが、少し安堵した息遣いが聞こえた。

「ただ……………」

大姫の低い声音に、空間が緊張した。

「頭でそうわかっていても、心はそうはならないものだ、私はやつとわかりました。義高様を恋う気持ちは相も変わらず、むしろ強くなるばかりです。だからこそ、私は今このような状態にあるのですが。そして、その気持ちは、父上の、いえ、この血への憎しみへとなってきたおります」

大姫はここで一息つく。頼朝の顔はますます強張った。

「もうすぐ父上も、私のいる世界へいらっしゃることでしょう。もしかすると、先に地獄へと落ちることになるのかもしれないが。父上の後には、頼家や実朝がいらっしゃいますから、ご安心のことでしょう」

「……………何が……………言いたい！」

頼朝は、だんだんと恐怖が増してきたのか、ついに声をあげた。

それは、大姫が聞いたことのない、ひどく焦燥の念にかられた声だった。

大姫は、それに動揺することなく、落ち着いて続けた。

頼朝の声も、子供の頃はあんなに怖かったのに、今では子供が怒鳴る声のように聞こえた。

「血というのは、大事でございましょう。人であれば、自分の血を持つ子らを後の世まで残したいと思うもの。父上の血を持つ彼らは、

立派に育っていくことでしょう。しかし、私はそれを許すことはありません。義高様の、そしてそのお父上の血の元に成り立つものなど。……私は、父上に呪いをお贈りいたします。父上の血をひくお子らは立派に成長いたしますが、不思議と子供はできず、皆短命で死にゆく呪いにございます。そうすれば、源氏の血は、自然と絶えていくことでしょう……」

「大姫！ お前は自分が何を言っているのかわかっているのか！」

大姫は、穏やかな笑顔を浮かべた。

「わかっておりますとも、父上。また、それほど私の思いは強いということでございます。もう短い御命、自分の生きてきた道を振り返るのも良いことでしょう。なぜこうなったのか、と。……私は、いつまでもこの呪いによって、源氏の血を見ていきます。私が輪廻の中に混じる時、それは呪いが完成した時でしょう」

大姫が言い切ると、その姿は頼朝の前から、かき消えた。

頼朝は、目を見開いたまま、しばらく天井をじっと見つめていた。いや、天井よりも、もっと遠くを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2435t/>

呪われた血

2011年5月31日12時33分発行